石川県地域史に関する共同研究
―林宥一さんとの仕事に関連して―

橋本哲哉

林宥一さんが急逝して、早くも4か月が経過しようとしている。9月25日の金沢大学の追悼会に続いて、11月14日の東京での追悼会も盛会のうちに終了した。暑かった北海道・深川での葬儀を思い出すと、今研究室の外のしぐれ模様が月日の早さをつくづくと感じさせる。

東京の会は研究者仲間が中心だったせいもあり、大変アカデミックな雰囲気にあふれていた。その時に語られたの林さんの業績の主要な部分については、一周忌に出版を予定している追悼文集『銀輪』に収録するつもりである。ここではそれをあらかじめ補足する意味で、石川県地域史について一緒に行った研究作業を回顧しておくことにしよう。

『石川県の百年』の出版

1987年の夏、山川出版社からふたりの共著としてこの本を刊行した。従来の研究動向を踏まえ、各々の得意分野を中心に執筆分担し、それほど多くの時間を費やさずに書き下ろした通史であったと思う。そして後書きのなかで、「石川県人」ではないふたりが、こうした共同研究作業を行った結果、「石川県地域とそこに住む人びとに対する私たちの理解は何がしかは深まった」と述べた。しかし「この地に近代史はあるのか」との疑問は必ずしも払拭できなかった。

もちろん、この時のふたりはまだ他の研究テーマや仕事をそれぞれ抱え、石川県地域史に研究の重点を置くまでには至っていなかったからでもある。その後共著の反省を話しあい、共同研究のサークルをもっと広げ、とくに育ってきている地元の若い研究者の力を動員しようということになった。

地域史研究会の試み

心機一転、ふたりで発起したのがこの研究会である。参加メンバーは大学から松村敏（当時、教育学部助教授）、それに新本欣悟（小松高校教諭）、太多誠（金沢二水高校教諭）、本康宏史（石川県立歴史博物館）、山本吉次（金沢大学附属高校教諭）の諸氏。1988年中頃のことであったと思う。その直後から私は大学内で超多忙となり、研究会のリード役はほとんど林さんに任せ切りにしてしまった。私にとっては数少ない「学問の場」で、極力欠席せずに通したと記憶している。

第1回研究会は『地域をなぜ問いつづけるか』（金原左門著）を林さんが取り上げ、以降メンバー全員が文字通り地域史に関する自分の問題関心をぶつけあった。とても気持ちのよい研究会で、各人の研究意欲の強さが毎回の会に足を向かわせた主因であったことは間違いない。

『金沢市史』の編さん

研究会で蓄えた力を具体的な場で発揮しよ

うと次に取り組んだのが、金沢市史編さんの仕事である。私がその近代部会長を引き受け、同時に研究会の全員に専門委員の肩書きをつけてもらった。後、松村さんが東海大学に転出したこともあって、後任の奥田晴樹（現教育学部教授）さんにもメンバーとして協力を願った。

発足した1993年当時は、近代部会なのか地域史研究会なのかよく境界がはっきりしない活動で、しばらく勉強会を続けた。数年後近代資料編上巻をまとめる段になり、資料の調査と収集、整理、資料編の基本的枠組みづくり等の編さんの舵取りはもっぱら林さんの力を頼りとした。彼の五加村研究会での蓄積、他自治体史での経験が非常に大きな貢献をしたといってさしつかえない。

とくに林さんが強調したのは、「近代金沢という都市をどのような特徴として捉え、それを資料編のなかでどのように自己主張するのか」という点であった。かなりの時間、このテーマをめぐって議論を繰り返したが、実に充実した水準の高い内容であったと思い出している。その結果、資料編上巻は戦前期の政治・行政、産業・経済を中心とするが、「金沢論」と「軍事」の２章を設けることになった。今年の３月無事発刊にこぎ着けたが、いまあらためて上巻の目次を開いてみて、林さんの自治体史への思いがこの２つの章を通じてとくに強く伝わってくるのである。

＊　＊　＊

大学内における雑用の山も峠を越し、これから林さんと本格的な共同研究を一層押しすすめようと考えていた矢先、彼は突然去っていってしまった。その後ろ姿を見ていると、彼は石川県地域史研究に関しては駆け足のような早いペースでわれわれにすべきことを提示して、その猛スピードを落とさないままに逝ってしまったような思いにとらわれる。この15年間ほどの地域史共同研究を簡単にふり返ってみたが、残された者が後の役割を果さなければならないことはよく承知している。しかし、いまだに欠けた穴の大きさにたじろいでいる有様である。多分、それは私だけの感慨でもあるまいと思う。

（金沢大学経済学部教授）

林さんの現代社会批判と運動論

伍　賀　一　道

今年８月、林宥一さんの葬儀に参列するために初めて訪れた北海道・深川は広大な農地に囲まれたこじんまりした街でしたが、駅前には核兵器廃絶をもとめる看板が立っていましたし、田圃の中には、農産物の生産者価格の保障を求める農民組合のポスターが目につきました。林さんはこのような雰囲気がもっと活発であった頃、その空気を吸って成長したのでしょう。社会的差別や不公正に対して特に敏感でした。次の文章にあるように、こうべを垂れて嵐がとおりすぎるのをひたすら待ち続ける態度を林さんは厳しく批判してい